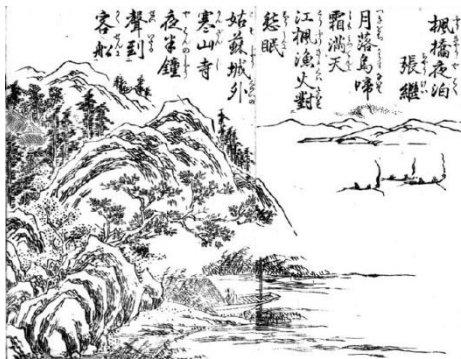


江南漢詩集



上有天堂 下有蘇杭



目次

江南春	杜牧	四	楓橋夜泊	張繼	一四
尋胡隱君	高啓	五	蘇臺覽古	李白	一五
憶江南 其一	白居易	六	越中覽古	李白	一六
惠崇春江曉景二首	蘇軾	七	九月九日憶山中兄弟	王維	一七
憶江南 其二	白居易	八	蘇州夜曲	西條八十	一八
題臨安邸	林升	九			
飲湖上初晴後雨二首	蘇軾	十			
六月二十七日望湖樓					
醉書五絕	蘇軾	一一			
靈隱寺月夜	厲鶚	一二			
憶江南 其三	白居易	一三			

江南

江南春

杜牧

江南の春

杜牧

千里鶯啼綠映紅

千里鶯啼いて綠紅に映ず

水村山郭酒旗風

水村山郭酒旗の風

南朝四百八十寺

南朝四百八十寺

多少樓台煙雨中

多少の樓台煙雨のうち

(杜牧) 晚唐(八〇三〜八五二) 若い

頃揚州で享樂的な生活をおくった。

(南朝) 建康(金陵||南京)を都と

(江南) 長江下流の南の地方。江蘇省

した宋・齊・梁・陳(四二〇〜五八九)

南部、安徽省の一部及び浙江省北部に

の王朝。前の吳・東晋を加えて六朝。

わたる一帯の地。

貴族が勢力を持ち、仏教が栄えた時代。

尋胡隱君

高啓

渡水復渡水
看花還看花
春風江上路
不覺到君家

胡こいんくん隱君を尋ぬ

高啓

水を渡り 復た水を渡る
花を看 還た花を看る
春風江上の路
覺えず君が家に到る

(高啓) 元末明初 (一三三六〜七四)

長洲 (蘇州) の人。

(胡隱君) 胡という姓の隱者

江南

江南

憶江南 其一 白居易

江南を憶ふ 其の一 白居易

江南好し

江南好

風景旧より曾て諳んず
もと

風景舊曾諳

日出江花紅勝火

日出づれば江花紅きこと火に勝り

春來江水綠如藍

春來れば江水綠なること藍の如し

能不憶江南

能く江南を憶はざらんや

(白居易) 中唐 (七七二〜八四六)

(憶江南) は「詞牌」という歌曲のひ

字は樂天。杭州刺史。蘇州刺史。

とつの名でもある。

惠崇春江曉景二首

蘇軾

竹外桃花三兩枝
春江水暖鴨先知
蒹葭滿地蘆芽短
正是河豚欲上時

えすう
惠崇の春江曉景二首

蘇軾

竹外の桃花三兩私
春江水暖かにして鴨先ず知る

ろうこう
蒹葭は地に満ち蘆芽は短し

正に是れ河豚の上らんと欲する時

(惠崇) 宋初の僧、画家。「春江曉景」
は惠崇の画の題。

(蘇軾) 北宋(一〇三六〜一一〇一)

江南

(蒹葭) はシロヨモギ、(蘆芽) はア
シの芽。どちらも毒消しになる。「目
には青葉山ほととぎす初鯉」はこの詩
をもじったものという。

憶江南 其二 白居易

江南を憶ふ 其二 白居易

江南憶

江南を憶ふ

最憶是杭州

最も憶ふは是れ杭州

山寺月中尋桂子

山寺 月中 桂子を尋ね

郡亭枕上看潮頭

郡亭 枕上 潮頭を見る

何日更重遊

何れの日にか更に重ねて遊ばん

(桂子) 桂の実。(群亭) 杭州刺史の

役所内の亭。

(潮頭) 錢塘江の海嘯。

題臨安邸

林升

山外青山樓外樓
西湖歌舞幾時休
暖風熏得遊人醉
直把杭州作汴州

(林升) 南宋の人 (臨安) 臨時の行

在所の意。杭州のこと。

(汴州) べんしゅう 今の開封。北宋の都汴京。

※レストラン「樓外樓」あり。

杭州

臨安の邸やどに題す 林升

山外の青山 樓外の樓
西湖の歌舞 幾時か休まん。
暖風 薰得て 遊人酔ひ
直すら杭州を把つて汴州と作す

※南宋の杭州は、金に汴京を占領されているための臨時の都。それなのに、まるで汴州であるかのように遊びほうけていてけしからんという憂国の詩。

西湖

飲湖上初晴後雨二首 蘇軾

湖上に飲す 初めは晴れ後雨ふる

二首 蘇軾

水光潋灩晴方好

水光潋灩れんえんとして晴れて方に好し

山色空濛雨亦奇

山色空濛として雨も亦奇なり

欲把西湖比西子

西湖を把つて西子に比せんと欲すれ

淡粧濃抹總相宜

淡粧濃抹総べて相宜し

(西湖) 浙江省杭州市の西にある湖。

(西子) 西施。春秋時代の越の美人。

呉王夫差に愛され呉の滅ぶ一因となつた。

芭蕉 象潟や雨に西施がねぶの花

六月二十七日望湖樓

醉書五絶 蘇軾

六月二十七日望湖樓に

酔うて書す五絶 蘇軾

黒雲翻墨未遮山

黒雲墨を翻えして未だ山を遮らず白

白雨跳珠亂入船

雨珠を跳らせて乱れて船に入る

卷地風來忽吹散

地を巻き風來たつて忽ち吹き散ず

望湖樓下水如天

望湖樓下水天の如し

(望湖樓) 杭州の西湖のほとりにあつ

た樓閣。

西湖

西湖

れいじんじ
靈隱寺月夜

れいがく
厲鶚

靈隱寺月夜

厲鶚

夜寒香界白
澗曲寺門通
月在衆峰頂
泉流亂葉中
一燈群動息
孤磬四天空
歸路畏逢虎
況聞岩下風

夜寒く 香界白し
澗曲り 寺門痛ず
月 衆峰の頂に在り
泉 乱葉の中を流る
一灯 群動息み
孤磬 四天空なり
歸路は畏る虎に逢わんこと
況んや岩下の風を聞かんことを

(厲鶚) 清の文学者

憶江南 其三 白居易

江南を憶ふ 其三 白居易

江南憶

江南を憶ふ

其次憶吳宮

其の次に憶ふは吳宮

吳酒一杯春竹葉

吳酒一杯の春竹葉

吳娃雙舞醉芙蓉

吳娃雙舞す醉芙蓉

早晚復相逢

早晚復た相ひ逢はん

(吳宮) 蘇州。吳王勾踐の都。

(春竹葉) 酒の名 (吳娃)^{ごあい} 吳の美女

蘇州

蘇州

楓橋夜泊

張繼

楓橋夜泊

張繼

月落烏啼滿霜天
江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘聲到客船

月落ち烏啼いて霜天に満つ
江楓漁火愁眠に對す
姑蘇城外寒山寺
夜半の鐘聲客船に到る

(張繼) 盛唐 (生没年不詳)

(楓橋) 蘇州城西郊の橋。

(姑蘇城) 吳の都、今の蘇州。

(寒山寺) 楓橋の近く。寒山・拾得が

住職をしたという。

蘇臺覽古

李白

蘇台覽古

李白

舊苑荒臺楊柳新
菱歌清唱不勝春
只今惟有西江月
曾照吳王宮裏人

旧苑荒台楊柳 新たなり
菱歌清唱 春に勝えず
只今惟だ西江の月のみ有つて
曾て照らす吳王宮裏の人

(李白) 盛唐 (七〇一〜七六一)

(蘇台) 姑蘇台。吳王夫差の築いた宮殿。(菱歌) 娘たちが菱の実をとりながら歌う民謡。

(吳王宮裏人) 西施

蘇州

紹興

越中覽古

李白

越中覽古

李白

越王勾踐破吳歸
義士還家盡錦衣
宮女如花滿春殿
只今惟有鷓鴣飛

越王勾踐吳を破つて歸る
義士家に還るに尽く錦衣す
宮女は花の如く春殿に満つ
只今鷓鴣の飛ぶあるのみ

(越中) 越の都会稽 (今の紹興)

(勾踐) 春秋時代の越王。吳王夫差に捕らえられるが苦節の後に吳を滅ぼす。(鷓鴣) シャコ。キジ科の鳥。

九月九日憶山中兄弟

王維

獨在異鄉為異各
每逢佳節倍思親
遙知兄弟登高處
遍插茱萸少一人

九月九日山中けいていの兄弟を憶う 王維

独り異郷に在つて異各となる

佳節に逢うごとにますますしん倍親を思ふ

遙かに知る兄弟高きに登る処

遍しゆゆく茱萸を挿して一人いちにんを少かくを

(王維) 盛唐 (六九九〜七五九)

(九月九日) 重陽の節句

(茱萸) 和名カワハジカミ、赤い実が
なる。

重陽節

蘇州夜曲

作詩 西条八十

作曲 服部良一

1 君がみ胸に 抱かれて聞くは

夢の船唄 鳥の唄

水の蘇州の 花散る春を

惜しむか柳が すすり泣く

2 花をうかべて 流れる水の

明日の行方は 知らねども

こよい映した ふたりの姿

消えてくれるな いつまでも

3

髪に飾るか 接吻くちづけしよか

君が手折りし 桃の花

涙ぐむよな おぼろの月に

鐘が鳴ります 寒山寺

江南漢詩集

二〇一七年十月

江南漢詩旅行のために



